

香取遺産

Vol.62

た ひ な た い せ き
「多田日向遺跡」

民衆のための新しい寺、現る



▲左から多理草寺（9世紀初めころ）、三綱寺（9世紀中ごろ）、
観音寺（9世紀終わりころ）

多田日向遺跡は、東関東自動車道の佐原・香取インターチェンジから南東へ2kmほどの多田字日向に所在する奈良・平安時代の集落跡です。

平成元年の発掘調査で、9世紀の掘立柱建物群跡と寺号を墨書した土器がみつかり、集落と密接に関係する寺の跡であることがわかりました。寺は2回の建替えを経て、発展していきます。

当寺は、9世紀の初めころには創建されました。中心となる建物は、南北三間（約5.6m）、東西二間（約4m）でした。墨書には「多理草寺」があります。

最初の建替えは9世紀中ごろで、南北四間（約8m）、東西三間（約4.3m）と一回り大きくなっています。墨書は「三綱寺」があ

ります。「三綱」とは、年長・有徳の者で寺内の僧侶と寺務を統監する上座、寺の庶務を監督する寺主、寺務をつかさどる都伊那の3種の役僧を意味する仏教用語です。この寺名から推測すると、このころに三綱が揃い、

組織的にも充実していった時期といえるでしょう。2回目の建替えは9世紀

終わりころで、東側に底をもつ東西、南北とも三間（約6m四方）になります。方

一間の内陣をもち、本堂としての体裁を整えています。内陣とは本尊を安置する空間のことをいいます。本堂の東側には、南北八間（約17m）、東西二間（約2.4m）の僧坊と思われる建物もありました。寺として最も栄えた時期です。寺号は「観音寺」です。本

尊が観音像であったことがうかがえます。

仏教が日本に伝来して以降、有力者が私寺を建立してきました。その間、朝廷による仏教普及政策がとられ、天平13年（741）には聖武天皇により国分寺建立の詔が発せられ、仏教は鎮護国家を祈る公の宗教としての地位を確立します。

しかし、9世紀に入るころになると、民衆の救済を説く動きが出てきます。この仏教界の動向が、一般に受け入れられ、それまでなかった民衆目線での造寺が始まったと考えられます。衆生の済度を本願とする観音を本尊とした寺跡がみつかった多田日向遺跡は、それを示す良好な遺跡です。問い合わせ